

●次回予告

imperfect

ミナ ペルホネンのクリエイティビティ

本展では、次代を担うクリエイターとして注目されているミナ ペルホネンの代表でチーフデザイナーの皆川明氏を迎え、「imperfect(不完全な)」をテーマにモダンに変化する完全なかたちを模索する「ものづくり」のプロセスや素材へのこだわり、また逆に不完全なモノの持つ魅力に着目します。ミナ ペルホネンの大きな特色ともなっているオリジナルファブリックを中心に、アイデアの源であるドローイング、実際の制作を請負う工場の写真や映像、また新旧コレクションの一部や最新作でもあるアルネ・ヤコブセンとのコラボレーションによって生まれた家具などを紹介します。

皆川氏は、日本の「ものづくり」の技術を高く評価しています。各メーカー・工場との関係を「協働」の精神で見つめ直し、高めあっていくことで様々なオリジナルファブリックやボタン、バッグや靴などが生まれました。つくり手たちの創造性、あるいは日本の技術力…ミナ ペルホネンが大切にしている「ものをつくりあげていくプロセス」の素晴らしさをお楽しみください。

皆川明(ミナ ペルホネン チーフデザイナー):平成16年度デザイン学部客員教授

minä perhonen Akira MINAGAWA
ミナ ペルホネン (皆川明).....略歴

1995 minä 設立
2000 白金台に直営店をオープン。
2003 ブランド名をmiä perhonen(ミナ ペルホネン)に改める。
フリッツ・ハンセン社とのコラボレートによりミナ ペルホネンの布が張られたエッグチェアとスワンチェアを発表。
家具 "puu" (プー) シリーズを発表。

主な個展・展覧会
2002 「Exhibition of minä's works 粒子」スパイラルガーデン、東京
2004 「六本木クロッシング」森美術館、東京

著書
2003 「皆川 明の旅のかげら」文化出版局刊
2003 「Particle of minä perhonen 粒子」粒子展実行委員会著作
ブルース・インターアクションズ刊

*minä perhonen
minä はフィンランド語で「私」をperhonenは「ちょうちょ」を意味します。

会 期 2004年6月10日(木)→6月29日(火)
12:00→18:00日曜祝日休館 入場無料

会 場 名古屋芸術大学アート&デザインセンター

協 力 株式会社ミナ(ミナペルホネン)/株式会社アクタス/pieni・huone

後 援 株式会社国際デザインセンター/名古屋芸術大学後援会

関連企画 2004年6月26日(土)
12:00→16:00
公開講義
「imperfect ミナ ペルホネンのクリエイティビティ」
2004年6月24日(木)・25日(金)
ワークショップ
"Surplus" — それぞれのまかない —
主催・お問合せ 名古屋芸術大学デザイン学部/アート&デザインセンター
Tel : 0568-24-0325 (代表) Email : adc@nua.ac.jp



Steering committee MEMBER

H16年度 アート&デザインセンター 運営委員会メンバー

- センター長 神戸 峰男
委 員 池側 隆之
岩井 義尚
須田 真弘
瀬田 哲司
高橋 綾子
藤松 由美

A&Dセンター 江坂恵里子

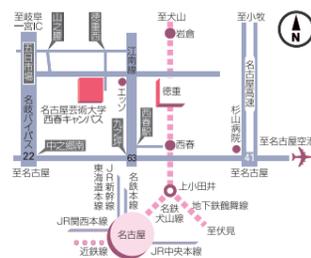
○編集後記

2003年5月に創刊した「Ble」も発行から1年が経ちました。大学のアート&デザインセンターから発行するニュースレターとして、今後も学内のみならず広く一般の方々にも興味を持っていただけるよう尽力して参ります。

4月から5月下旬まで、センター内のスタジオではスウェーデンとドイツから来日したアーティストが公開制作をしています。初めての日本での生活は驚きや戸惑いも多いようですが、アートという共通言語がコミュニケーション・ツールとなっているようです。(江坂)

Ble Vol.5
発行日 2004年5月15日
編集・発行 名古屋芸術大学アート&デザインセンター
〒481-8535 愛知県西春日井郡西春日町
Tel. 0568-24-0325 Fax. 0568-24-0326
E-mail adc@nua.ac.jp
URL http://www.nua.ac.jp
デザイン 岩田知人(サンメッセ株式会社)
印刷 サンメッセ株式会社

2004 Printed in Japan
© Nagoya University of Arts, Art & Design Center



交通のご利用
●最寄り交通機関をご利用の場合名鉄大山線(地下鉄鶴舞線乗り入れ)徳重駅下車西へ約1,000m徒歩15分。
●急行電車の場合は西春日で普通電車に乗り換えるか下車してください。西春日から北西2,200m徒歩25分、西春日からはタクシーの便もあります。
●自動車ご利用の場合
一宮インターから10分、名神小牧インターから15分、名古屋空港から10分

B!e

特集 Degree Show 『卒業展を考える』

3月は卒業制作展のシーズンで、本学および近隣の美術系大学の卒業展がこの時期に集中的におこなわれました。また同時に大学院修了展や、進級制作展のようなものも多様な場所でおこなわれていました。本学の卒業展も従来の愛知県美術館だけではなく造形科による名古屋市民ギャラリー矢田での展示も初めての試みとしておこなわれ、意欲的な作品展示となったようです。ここ数年、卒業委員を担当している立場としては、いつも物理的な調整におわれ(一定の会場の広さに対して学生数は増加傾向にある)、展示にとってもっとも良いコンディションとはどのようなものなのかという本来の問題に正面から向き合わないままに、時間が経過したようにも思います。

現在 美術大学が対象とする表現形式の多様さは、既にその全てを美術館というホワイトキューブの中に閉じこめておけるものではなく、教員も学生も既に気付いていることでしょう。(勿論、ホワイトキューブでの発表が最も効果をあげる作品も依然として存在していることも確かですが)また、本学でも昨年は出前卒業展(佐久島)などそのような発想に対応する企画展示も試みられました。サイトスペシフィックな作品や、プロセスを問題にする作品に対しては、展覧会の枠組み自体のありかたに対してこのような変革をおこなう必要が出てきているのかも知れません。例えば、美術ジャーナリズムにおいても卒業展はクローズアップされており、4月号の「美術手帖」では「卒業クルージング☆2004」という記事の中で3人の美術ジャーナリストが主に関東、関西の卒業展事情についてレポートしています。(P284～P287)そこではホワイトキューブ以外の空間:大学の構内、廃校の校舎、スパイラル(ワコールアートセンター)のような都市空間、寺院etcにおける多様な卒業展の実例が報告されています。また、場所性の問題だけではなく卒業展を社会に対してどのようにしてインフォメーションするのといった問題に対する取り組みも紹介されていました。ここではなぜか中部地域の美術系大学に関する報告が無いのですが、いずれにしても卒業制作展のありかたについて、本学でも教員と学生が多様な角度から討議し、その枠組みを変革する時期が到来しているように思われます。

津田佳紀(デザイン学部 教員)



5→7月 EXHIBITION SCHEDULE A&D アート&デザインセンター 展覧会スケジュール

「マム」展	5月 7日(金) ～ 5月 12日(水)
「魅せる×見せない」展	5月 14日(金) ～ 5月 19日(水)
FROM REMISEN ～JEANNETTE LINDSTEDT & SALAH SAOULI～	5月 21日(金) ～ 6月 2日(水)
春の企画展 imperfect — ミナ ペルホネンのクリエイティビティ	6月 10日(木) ～ 6月 29日(火)
洋画コース3年選抜展(仮称)	7月 2日(金) ～ 7月 7日(水)
素材の怪物展(仮称)	7月 9日(金) ～ 7月 14日(水)
前期留学生作品展	7月 16日(金) ～ 7月 21日(水)
夏期休館	7月 22日(木) ～ 9月 2日(木)

Open 12:00～18:00(最終日は17:00まで)日曜・祝祭日休館 【入場無料】どなたでもご覧いただけます。



特集
Degree Show
『卒業を考える』



出前卒業展「今、出ましたから。」
2003年3月8日～3月16日 佐久島にて

昨年度、佐久島で行った「出前卒業展」は、4年生を対象とした授業「芸術計画演習」の一環で企画運営された。有志21名が、実際に卒業制作展に出品した作品を、三河湾に浮かぶ佐久島まで、船で運び島の施設に展示した。準備から会期中を通して、温かく見守ってもらった島の人々へのお礼の意を込めて、神山山陽さんの講話を島のお寺で実施した。お寺の明かりが、学生たちは、紙コップの灯籠による演出で、お見送りをしたのだった。



卒業—もうひとつのかたち
おおがきビエンナーレ2004 (第5回世界メディア文化フォーラム)

『未来の学校』をテーマに開催されたこのビエンナーレは、世界メディア文化フォーラム実行委員会が主催、IAMAS (情報科学芸術大学院大学+岐阜県立国際情報芸術科学アカデミー) が企画運営を担当して開催された。IAMASの卒業制作展「IAMAS2004」の開催に合わせ、大垣駅前から続く商店街の空きビルや街の景観を取り込んでの作品展示は、参加型の作品が多く、街のスケールも歩くにはほどよく、鑑賞者は街を散策しながら作品を楽しむこととなる。歴史ある城下町、街中に水路が走るこの街の魅力を生かし、最先端の情報・メディア文化が展示され、様々なワークショップやシンポジウムも開催された。ここでは学生の作品を展示するだけでなく、IAMASの活動全体を知ることができる仕掛けとなっており、キャンパスと街が一体となってミュージアムになっていた。

*おおがきビエンナーレ2004は、1995年より隔年で行われている「世界メディア文化フォーラム」の新たな展開として2/21～3/7に開催されました。



URL <http://www.iamas.ac.jp/biennale04>

トピックス TOPICS レポート

吉本作次展
2004年2月14日～3月13日
ギャラリーセラー／名古屋市中区



画家・吉本作次 (1959年岐阜市生まれ) は、かつて、ニューペインティングのムーブメントの寵児だった。80年代のさなかである。名古屋芸術大学に在学中から、しばしばギャラリーに出入りしては、先輩作家の教えを請い、時には議論を挑んだ吉本青年は、ひょっとしたら、少々生意気な野心家だったかもしれない。ギャラリストは、そんな彼に世界のマーケットを意識したデビューを仕掛けようとした。やがて吉本は、バスキアやジュネールと名を連ねて、ジャーナリズムの中では“飛ぶ鳥も落とすような売れっ子”となった。

しかし、90年代に入って押し寄せた大きなスランプの中、ブツリと発表の機会を無くし、それは約10年におよんだ。しかし、淡々と思索し、描くことを止めなかった吉本は、2000年に入って見事に復活した。先頃の個展 (ギャラリーセラー) では、緻密な構成力と洒落な物語性に、ますます描く気力の充実が感受された。大作5点には、様々な意味を絵画という形式にきっちり押しとどめられたような安定が、小品やドローイングには、突き抜けた歓びと、戯れるかのごとく語りかける洒落っ気が満ちていた。

〈くだものどろぼうの図〉を手にしてみた。緻密な地塗が施された画面には、小鳥が果物を採り去っていくシークエンス。まるで落語のように、愛嬌のある画面である。画布の裏側にも秘密があった。昨年、イタリアの古都アッシジを訪れた筆者にとっては、なんと嬉しい、落書きのようなメッセージ。そこには、小鳥に説教をする聖フランチェスコがいた。

吉本の行為は、絵画そのものへのオマージュなのかもしれない。
美術学部美術文化化学科講師 高橋綾子

テーマ展 中條直人—アプリオリ—
2004年3月6日～28日
愛知県美術館 展示室6

私は1998年からシリーズ作品ア・プリオリを発表している。身体に内在する色彩の赤色から人間に与えられた生得的な感情をとらえることを主体に、今回は新作として自分のクローン人間を登場させた。変形パネルに油彩で裸体の部分を写実的な方法で描き、半ば古典的な技法に終始した。それは身体がもつリアリティを表現する為に、心地よいムードだけは排除しようと思ひ、強い画面を求めた結果だった。

展示では、先ず入り口付近に5点組の作品を配置して全体を構成したい思いが強く、他は旧作2点が向い合うように新作1点を挟むようなかたちをとる面白さを考えていた。また心配していた照明には案の定、2時間以上もかかってしまった。

企画者である学芸員の押戸雅彦氏が去年の8月、アトリエに来てくれた。並んだ作品を初めて見た彼は、しばしの間黙してしまった。その後約2時間程、あまり会話は弾まず、急に降り出した土砂降り雨の中、彼を地下鉄の駅まで送り届けたが、彼の残した発言に私も刺激され、結局数点の描き直しを11月までかけた。展覧会決定の知らせはそれから間もなくだった。私にとっては、絵画をどのように使うのか、という一つの挑戦を美術館で発表することに意義を感じていたから、この展覧会は大いに意味があった。これからは常に絵画の有用性について考えていく。

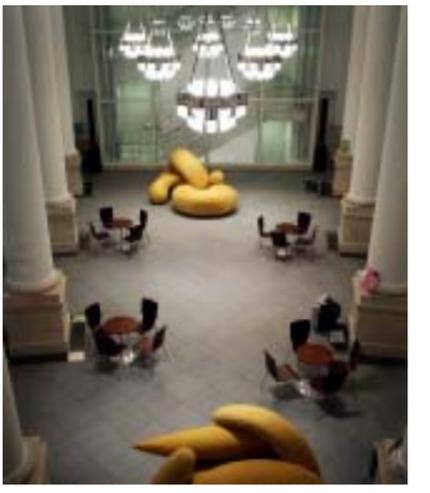
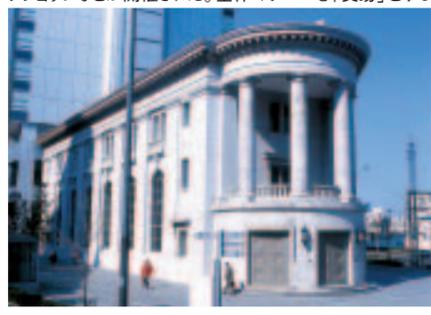
デザイン学部非常勤講師 中條直人



BankART1929 オープニングプログラム
2004年3月6日～4月4日
横浜市馬車道

本学大学院非常勤講師の池田修 (PH STUDIO) が運営に参加する横浜市の2つの歴史的建造物 (旧銀行) を活用した文化・芸術の実験プロジェクト「BankART1929」が今年3月にスタートした。オープニングプログラムとして、杉浦隆夫のインスタレーション、橋橋朝子の展覧会、レクチャーやパフォーマンス、ワークショップなどが開催された。全体のテーマを「交易」とするこのプロジェクトでは、様々なかたちで活動している市民・アーティスト・建築家・研究者・行政関係者やプロデューサーらが交差する「場」として開かれており、新しい芸術文化のネットワークを構築しようとしている。何よりもこのプロジェクトを行政が提案し、民間に企画・運営をゆだねていくという試みがアートを通して都市の発展にどうつながっていくのか楽しみである。今後も随時スタジオやスペースの提供、カフェやバブの運営、ブックショップの併設、BankARTスクールの開校など成長していくプロジェクトとなっていく。

URL <http://www.bankart1929.com>



RELAY ESSAY
近世文芸と法

近世の法を理解する方法の一つとして、世話物浄瑠璃や浮世草紙、人情本、狂歌や落書を利用することは行われてきた。日本法制史学を専門とする私は、多様な近世文書に接してきたが、『「膝栗毛」文芸と尾張藩社会』(1999年3月、清文堂) という仕事に参加して初めて、名古屋の戯作者の手になる地域版「膝栗毛」を眼にした。「膝栗毛」といえば十辺舎一丸の『東海道中膝栗毛』がすぐに思い起されるが、名古屋でも一丸に刺激された地元作者による尾張版「膝栗毛」が多く出版されていた。尾張版「膝栗毛」の主人公弥次郎兵衛・北八は、名古屋城下や知多大野 (常滑市大野)、津島といった観光地を旅した。その意味では観光案内としての性格も持っていた。作品は話の面白みとは別に、当時の町の様子や人々の暮らしがリアルに映し出されている。そこでは厳しい儉約令が「儉約特需」といふべき消費を生み出し、東西の名代が来演する芝居興行は賑わいを見せ、農村では

松田憲治

華美を競った祭りが行なわれる現実が、生きて旅する人間の視野と行動から描き出されていた。都市下層民対策に汲々とする江戸と異なる、濃尾平野の豊かな生産力を背景とした名古屋の都市構造すら伺い知れる現実が、法令の分析だけでは知れない新鮮な驚きを与えてくれた。尾張版「膝栗毛」は法史的にも有用な史料であるが、そうした文芸を生み出す文化的基盤にも着目する必要がある。永楽屋東四郎に代表される書肆・出版文化、江戸・京・大坂との多様な文化交流、近世名古屋の持つ文化的基盤の大きさもまた研究の課題といえる。

美術学部教養部 (日本法制史)

